



宮司プレス 第百九十四号

彦島八幡宮 宮司ニユース

発行者 彦島八幡宮

宮司 柴田 宜夫

発行 令和四年十二月二十六日

◇宮司の柴田です。 寒さ一入（ひとしお）厳しき折節、いよいよ暮れ果ててまいりました。全国各地で、豪雪（こうせつ）による災害等が、連日報じられています。これは、南米ペルー沖の海水温度が下がる、「ラニーニャ現象」が、その大きな要因だそうです。ちなみに、「ラニーニャ」とは、スペイン語で、「女の子」という意味なのだそうです。なぜ、そのように名付けられたのでしょうか。 実は、海水温が高くなる現象を、「エルニーニョ現象」といいますが、毎年、クリスマスの時期に起きるので、イエスキリストの誕生、「男の子」の意味で、「エルニーニョ」と名付けられました。逆に海水温が上がる現象を、その反対の意味で、「女の子」、「ラニーニャ」と付けられたそうです。「エルニーニョ現象」は、猛暑となり、「ラニーニャ現象」は、極寒をもたらすということです。◇「冬至（とうじ）冬なか冬はじめ」といわれますが、一年のお日様の变化でみますと、過日の二十二日の冬至あたりを境に、昼は徐々に長くなり、光もじわじわと強まります。つまり、「冬なか」なのです。 一方、気温はといいま

すと、一月下旬の「大寒（だいかん）」のころが、一番厳しい冷え込みとなります。 こちらを「冬はじめ」というわけなのです。 「冬来たりなば春遠からじ」というところでしょうか。これは、イギリスの詩人シェリーの「西風に寄する歌」の一節（いつせつ）ですが、寒くて暗い冬がやってきているということは、暖かく明るい春がやってくるのも、そう遠くはないはずだという意味です。 転じて、今は不幸な状態ではあるが、やがて、きっと、幸せ満ち足りた日がくるのだから、じつと耐えて辛抱（しんぱう）しなさいという、諭（たと）えでもありません。少しづつ力をたくわえる始点（してん）ということになるのではないのでしょうか。◇さて、毎年、年賀状の表の宛名も、さらに、裏の御挨拶文も浄書しています。 裏面は、全部で十五種類の御挨拶を浄書し、印刷しました。今年、特に敬神生活のスローガンとして提唱（ていしょう）してまいりました、「実一久（じついつきゆう）」と「三幸実践（さんこうじつせん）」を新たに加え、取捨選択（しゅしゃせんたく）、新旧の御挨拶文の入れ替え作業もおこな

いました。 その年賀状をシャフルして、目下、寸暇（すんか）を惜しんで、宛名を墨書（ぼくしょ）しています。 したがって、誰にどの御挨拶文が届くのか、届いてからのお楽しみというのが、私の毎年の年賀状スタイルであります。◇前号に約束しましたように、今月二回目の発行となり、今年も、一月に一回発行のペースをかるうじて、維持できたこととなります。 年末の宮司プレスは、大晦日（おおみそか）の編集発行が、茶飯事（さはんじ）でしたが、今年の大晦日は、ゆつくり過（こ）せそう、「やればできる」のであります。 お待たせしました、「有言実行（ゆうげんじつこう）」の宮司プレス百九十四号の発行です。◇さて、コロナ禍になって三年、パンデミック（世界的流行）は、世界のあらゆる社会の脆弱性（ぜいじやくせい）、もろくて弱いこと（す）をあらわにしたのではないのでしょうか。 今、世界経済は、スタグフレーション（景気後退とインフレ）物価上昇の影におおわれようとしています。 ウクライナ戦争やアメリカと中国の覇権（はけん）争いによる分断（ぶんだん）が大きな要因で、もちろん、パンデミックの影響でもあります。 十九世紀の英国が、「パクスブリタニカ（英国による平和）」を維持できたのは、産業革命による技術革新でありました。 二十世紀に米国が、「パクス アメリカーナ」を

達成できたのも、大量生産システムと通信革命の技術力でした。バイデン政権は、最先端の技術革新で中国に打ち勝ち、中国の覇権を示す、「パクス シニカ」を作らせないと、さらに、米中の分断は続いていくそうであります。そうなってきましたと、日本の果すべき役割は、米中のはざまで、重くのしかかってくるのです。コロナ禍で私共に突き付けられたのは、農耕を始めてから脈々と築いてきた、「協調関係」の危機なんだそうですが、国際協調、外交戦略も重要となってきました。

◇日本にも、歴史上、「パクス ヤポニカ(日本の平和な時代)」という、戦乱のない泰平(たいへい)の世が二回ありました。それは、平安時代と江戸時代の約五百年間です。なぜ、我々の御先祖様は、そのような時代を創(つく)ることができたのでしょうか。それは、日本人らしい、「従順性(じゆうじゆんせい)」と「寛容性(かんようせい)」であったと考えられています。その顕著(けんちやく)な特徴は、天皇制(てんのうせい)と神仏習合(しんぶつじゆうごう)です。どんな苦境にあっても、天皇陛下の「バランス オブ パワー」としての御存在を心の柱として、耐え忍び乗り越えてきたのです。コロナ禍でありながら、社会的秩序を保てたのも、「従順性」のなにもでもありません。そして、異なる文化をも受け入れて、

さらに、日本らしく進化させてまいりました。明治維新から戦後の高度経済成長をとげたのも、海外からの技術を導入し模倣(もぼう)したりして、技術の移転をおこない、技術を進歩させたからなのです。これを「技術スピルオーバー」とよびますが、まさに、「寛容性」そのものといえるでしょう。今、この日本人らしさを駆使(くし)して、三回目の「パクス ヤポニカ」を、目指さなければならぬのではないかと考えます。

◇さて、来年は、六十通りの干支(えと)の組み合わせの四十番目となる「癸卯(みずのと)の年」であります。水の働きの弟さんの年まわりでありますから、「水滴(すいてき)、雨露、小流(しょうりゅう、小川のことです)の水」ということになります。「癸」は、「き」と読み、「はかる」という意味があります。草木の内部にはらまれたものが、その長さをはかれるくらいに成長している状態です。卯は、「ぼう、茂(しげ)る」という意味、それから、「ぼう、冒(おお)う」という二つの意味があります。草木が成長して地面を蔽(おお)うようになつた状態です。したがって、大いに成長して、あげくに、包み込まれてしまう年回りといえるでしょう。実は、「癸卯」は、「きぼう」と読めるのでありまして、きつとよくなるという希望を失わず、水滴や雨露のように、い

つも、みずみずしい、「従順性」、素直な心で、それでいながら、何が起ころうとも変わることはない、「小川の水のせせらぎ」のように、「寛容性」、優しい思いやり、利他の心で過(こ)したくないものです。前述(ぜんじゆつ)したように、「スタグフレーション」に包み込まれてしまつては、困ります。皆様方にとりまして、善きこと、幸せな思いに包み込まれる、そのような年でありますことを心からお祈り申し上げます。

◇十二月の祭典行事報告

▼月次祭 \*十二月一日、十五日

▼貴布禰神社月次祭 \*十二月一日

▼祈漁祭 \*十二月三日

▼大注連縄おろし

▼彦島八幡宮 \*十二月十一日

▼田の首八幡宮 \*十二月十八日

▼朝粥会 \*八月二十一日

▼大千支絵馬奉納奉告祭 \*十二月二十四日



▼正月臨時巫女説明会 \*十二月二十七日

▼除夜祭、大祓式 \*十二月三十一日